
弟以上恋人未満（みーちゃんと悟の場合）

alice

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

弟以上恋人未満（みーちゃんと悟の場合）

【Nコード】

N2203Z

【作者名】

alice

【あらすじ】

『ときの流れの中で…』のスパン・オフ作品第一弾、「みーちゃんと悟の場合」です。

高校に入学して始めてできた友達は凜とミコ。
そしてそんな凜の弟の悟君とみーちゃんとの出会いです。

第一話 出会いは友達の弟

『ときの流れの中で…』のスピン・オフ作品第一弾、「みーちゃんと悟の場合」です。

アタシは佐倉 美由紀。

この春、ずっと憧れていた青葉学院高等部に入学することができた。

中学時代はなぜか勉強ができてしまったからクラス委員なんてものを何回も押し付けられたりしていた。

じつはウチの母親は日本人とイギリス人のハーフなんで、アタシはクォーター（1/4）ってことになる。

そしてウチの母親の母親、つまりアタシの母方のおばあちゃんというのがイギリス人なんだけど、彼女はお父さんが日本の大学の先生だったもんで小さいときからずっと日本で育ち、近所の男の子たちと街中を駆け回って遊び狂い、そのため英語というものをほとんど忘れてしまったらしい。

しかも住んでいたのは浅草なもんだからもう完全なبرانમેعの江戸っ子気質。女の子なのに祭と花火が生きがいだったそうだ。そんなおばあちゃんに育てられたアタシの母親も完全な江戸っ子になつてしまい、笑えない話だけど、ウチの母親は学生時代は英語が大の苦手で英語を話している外人を見ると同じような顔をしている自分に話しかけられないようにすーっと避けて通っていたらしい。大学入学は推薦だったらしいけど、英語の成績の悪さを国語と数学でカバーしていたっていうんだから大したもんだ。そして何を考えているのかわかんないけど、私の母親は白人を見るとすべてアメリカ人だと思い込んでいる。

中学校の半ばまで英語の英がイギリスを意味しているということを知らず、アメリカ発祥の言語だと思い込んでいたというから呆れてものも言えない。

しかし、さすがにアタシが生まれたとき、イギリスにいるおばあちゃんやんの親戚たちもこれではまずいと思ったのか、来日したときはアタシに英語で話しかけるなどをしていたらしい。

そのためかアタシは幸いにも英語に拒絶心をもつことがなくあくまで勉強としてだけど小学生の時には日常会話くらいは話せるようになった。

そんなアタシに周りの人たちは、勉強ができてクォーターなんて先入観があるとやっかいな幻想を抱く。そしてその幻想はアタシにとつてかなり迷惑なものだった。

「みーちゃんってお人形さんみたいなキレイな顔してるねー。」

「頭もいいし非の打ち所がない娘だ。」

「いつもニコニコと明るくてキミはクラスの華だヨ。」

そんなことを1年生のときからずっと言われ続けてきたけど、そんなのちつとも嬉しくない。

アタシはもつともつと何でも話せてバカやれる友達がほしかったんだヨ！

でもイメージっていうのはホントに恐ろしいもので、一度作られちゃったら簡単には壊してはくれない。

そのおかげでアタシの周りにいるのは参考書をマンガのように楽しく読める奇人変人ばかり。

だから中学を卒業とき、高校に入学したら絶対アタシのイメージを

変えてやるーっ！

ホントのアタシの正直な気持で付き合える友達に囲まれて面白おかしい高校生活送ってやるぞーっ！
って思ってた。

そして入学式の日であつたのがこの2人だつた。

入学式の日

ウチの中学から青葉学院に受験したのは3人だつたけど合格したのはアタシ一人だつた。

これはアタシにとつてじつにラッキーなことで、中学時代のイメージ破壊には絶好のチャンスだ。

「さあー、友達百人作るぞー！」

そう思つて初めての教室に飛び込んだアタシだったが、周りをみると当然知らない人ばかりで話す切っ掛けもみつからない。

中には附属の中等部から内部進学してきている人たちも何人かいるらしく、そういう人たちはすでにまとまって楽しそうに話をしている。

そのとき少し離れた向こう側でアタシの方に手を振ってくれる女の子を発見！

（あ、あの娘、友達になつてくれるかも。）

アタシは手を振ってそれに応え、そしてウキウキと小走りでその娘

の方に近づいていくと

すっ――――

とその娘はアタシを通り越して反対側へ

「あー、優ちゃん。同じクラスになれたんだねー！」

と後ろの方で別の娘がその娘と抱き合って喜ぶ姿を見てしまう。

「ちっ、なんでー。 やっぱり中等部組かあー。」

そんなことを心の中で呟きながら、とにかく空いている席に腰を降ろした。

フツと隣の席を見ると女の子が2人、やっぱり楽しそうに話をして
いる。

（あーあ、どうせこの娘たちも内部組なんだろうな…。）

一人はセミロングにふんわりとした感じのカールをかけた髪、笑っている感じがすごくフェミニンで可愛い娘だった。もう一人は少し長めのボブカットにハッキリした目鼻をしていて美形タイプの女の子。

小さい頃から「お人形さんみたい」なんて言われてきたアタシだけ
ど、お人形さんなんてもんは結局心がないものだからいくらキレイ
でも魅力なんかあるわけじゃないのさ。

ああ、この娘たちってなんかすごくキラキラして可愛いなあ…。
アタシがもし男に生まれていたら、きっとこういう娘と付き合いた
いって思っただろうなあ。

もしアタシが男で、高校入学の日にこの娘と運命的な出会いをしたとする。

そしていつの間にか惹かれあってしまう2人…。

放課後

アタシはあのカールの娘と偶然帰り道が一緒に

「送るよ。」

「…アリガト。」

フツと気がついたらあのカールの娘とアタシは夕暮れのキャンパスの隅で…。

わぁー！っ！

違うっ！ーのっ！

アタシは女じゃん！

そんな気ないよぉー！

そんな妄想を頭にめぐらしていると、そのうちの一人のふんわりした感じの娘とパツチリ目が合ってしまった。

（ど、どうしよう…。目を逸らそうか。いや、ダメ！美由紀、これがチャンスだと思って声をかけちゃえ！とにかく誰かと友達になっ取っ掛かり作らないと！）

「は、はじめまして。」

アタシはドキドキする鼓動を抑えながらなんとか声を絞り出した。

「あ、はじめまして」

（やったー！初めて会話が成立したー！）

「なんか仲良さそうに話してたけど、2人は中等部から？」
「ううん。2人も同じ中学出身なの。」

（そ、そうだったんだ。じゃあ、アタシと同じ外部組じゃん。やったっ！やっとならった獲物をみつけたぞぉー！）

お互いの自己紹介をする

ふんわりした感じのフェミニンガールが小谷 凜ちゃん。

そしてハッキリタイプの美人さんが藤本 美子ちゃんというらしい。

「アタシは藤本 美子です。でも中学のときまでずっとミコって呼ばれてたから。」

「ヨロシクね。あたしはみーって呼ばれてた。」

「じゃあ、ミコと凜とみーちゃんていいよネ？」

やったぞぉー！

その日のうちにあだ名で呼び合える友達をゲット！

こうしてできた高校生活最初の友達がこれからのアタシの人生を大きく左右することになるとはこのとき微塵も考えられなかった。

彼女たちとの付き合いが始まってみると、この2人の関係ってというのがじつに面白いつていうか興味深いものだった。2人ともぜんぜんタイプが違うのに、よくこんなに仲がよく付き合えるものだと不思議に感じる。凜はどっちかというと自分の感情に素直なまっすぐタイプ。それに対してミコは緻密に物事を考えて行動する作戦タイプの娘に思えた。

そしてそんな彼女たちに混ざっていると、そこには飾らない姿で楽しんでしまえるアタシがいた。

入学式が終わって1ヶ月ほどしたある日の土曜日

「ねえ、みーちゃん。今日よかつたらウチに遊びに来ない？ ミコモ一緒だよ。」

フェミニンタイプの凜からそう誘われた。

中学時代に友達の家に行くことはあっても、みんなガリ勉ちゃんばかりだったので、家ですることといえば勉強だけ。遊びに行くんじゃない勉強するだけなのだ。

勉強の合間に話しかけても迷惑そうな顔されるだけ。

「だったら誘うんじゃねーヨ！」
と言いたくなってしまう。

ようはお互いどれだけ日頃勉強してるか偵察ついでに一緒に勉強しようってことなんだろう。

ところがこの2人といると勉強のべの字も会話に出てこない。そうなるとアタシも段々と本性が出てきてしまってもんだ。

まあ、いくら友達の家といっても初めて行くわけなので、アタシは途中のケーキ屋でケーキを6つばかり適当に見繕って買った。

彼女の家は想像したよりもかなり大きく、話を聞くとお父さんがスーパーマーケットやコンビニを経営している社長さんらしい。そういえば凜はやっぱお嬢様タイプに見える。

「あら、まあ。お人形さんみたいに可愛い人ねえ！」

凜のお母さんはアタシを見てやっぱりこう言った。

フッフッフ…。

お人形さんの外見なんて楽しい高校生活の前には無関係ヨ！

そのうちこのお母さんもアタシの真の姿を知ることになるだろう。

そして家に入るとダイニングでお母さんがお茶を入れて、アタシの買ってきたケーキをお皿に分けて出してくれた。

そのとき

「あー！ー！ケーキだ！ いいなあー！」

と言って顔を覗かせた男の子。

「悟、お姉ちゃんの友達来てるんだからアッチ行つてて！」

凜はその男の子にそう言っただけで追いついてくる。

しかしその男の子はそんな凜の言葉なんかお構いなしにこっちに寄ってきた。

「あ、ミコちゃん。 ひさしぶり。」

「悟、元気だった？」

この男の子はいつもミコのことを良く知っているらしい。

あ、そっか…。

考えて見れば凜とミコは中学からの友達なんだもんね。

でも…。

この子ってかわいい…。

なんかこの子を見るとすごく切なくなるような。

「弟さん？」

「ウン。悟っていつて今年中1になったの。」

あ、そつか。

アタシたちより3歳年下なんだ。

ってことは…

もし小学校のとき死んじゃったアタシの弟の修が生きてればおない年なんだ…。

そんなことを考えていたとき

「あ、凜ちゃん。チョコケーキだあー！ いいなあー！」

と悟君が凜の前に置かれたチョコケーキを指差して叫んだ。

「悟君、チョコケーキ好きなの？」

アタシは彼に尋ねた。

「ウン、大好き。チョコがいっぱいかかってるのが一番好きなんだ。」

アタシは凜の前に置かれたそのチョコケーキのお皿をさつと取り上げて

「ハイ、悟君。ドーズ。」と差し出した。

凜は「エ！？」という顔をする。

「アンタ、お姉ちゃんなんだから我慢しなさい！」
アタシは凜に向かってこう言った。

「あーん、アタシのチョコケーキー！ アタシもすきなのにー（泣）」

こう言って凜は物欲しそうな顔をするがそんなのお構いなし！
ミコはそれを見てゲラゲラと笑っている。

「これ、ボクがもらっちゃっていいの？」
悟君は嬉しそうな顔でアタシに尋ねる。

「もちろん！悟君のために買ってきたんだからー。」
あたしがそう言つと

「うっそだー。みーちゃん、今初めて悟と会ったんじゃない！」
凜があくまで抵抗するけど、そんなのアタシはぜんぜん無視！無視！

じつはそのときアタシは悟君のそんな嬉しそうな笑顔に吸い込まれてしまう自分を感じていたんだ。

第二話 チョコケーキ

その日

アタシは家に帰ると、頭の中に思い浮かんでくるのはなぜか凜の弟の悟君のことばかりだった。

（3歳も年下の子だヨ。）

なんていうんだろう…。

なんかカレと話していると心の中を触られているような。

それは『かわいい』って感情なんだろうか。

それとも…。

そんなことを考えながら、さっきから自分の部屋の机に向かって座ってボーっとしている。

すると

コンコン

部屋のドアをノックする音

「みーちゃん、お父さんがケーキをお土産に買ってきてくれたけどどうする?」

母親がドアの向こうからアタシにそう尋ねた。

「あ、ウン。今、下に降りてくから。」

階段を降りてダイニングに入ると、ちょうど父親がスーツの上着を

脱いでネクタイを外しているところだった。

「あ、お父さん。おかえりなさい。」

「おー、キャサリン！ ただいまー。」

父親はアタシの顔を見るなり大袈裟なポーズでそう応えた。

「お父さん、そのキャサリンっていうのやめてヨ。 第一アタシはクォーターで純日本国籍なんだから、ミドルネームなんか持つてないんだヨ！」

「いいじゃないか？ オマエ、それで青のカラーコンタクトでもすれば立派にイギリス人を通るぞ。」

「アタシはコッテコテの日本人！ キャサリンなんて名前じゃなくて美由紀だって何度言えばわかるのヨ！」

じつはウチの父親は外務省に勤めてるんだけど、母親と真逆でとにかく欧米かぶれだった。

そのためアタシに元々ありもしない勝手なミドルネームをつけて呼んだりする。

ただし出身は埼玉県の所沢で父方の家は代々造り酒屋。

欧米なんかウチの父親の出自には縁もゆかりもない。

しかもこの父親、ときどきとんでもない発想を持ってしまい、母親がアタシを産むときアメリカの病院に行かせようとしたらしい。

アメリカは出生地主義なので、日本人と日本人の間に生まれた子でもアメリカ国内で生まれればアメリカの市民権を持つことができる。それでアタシにキャサリンなんていう奇妙なミドルネームをつけようと企んだらしい。

しかし江戸っ子万歳の母親はこれに強硬に抵抗した。

日本人とイギリス人のハーフの母親は純日本人の父親に

「せっかく日本人に生まれたのにアメリカの市民権なんていらー

ーん！」

と一喝したそうだ。

そんなわけで、アタシはハーフのくせに江戸っ子気質の母親と埼玉出身なのに西洋かぶれの父親というチョット変わった環境の中で生まれたわけだ。

アタシには以前弟がいた。

修しゅうといって、アタシの三歳年下。

少し年は離れていたけど、アタシたちはいつも一緒によく遊んでいた。

それがアタシが小4のときのある日、

修は友達と近所の公園で遊んだ帰り道に信号無視をして突っ込んできた車に轢かれて亡くなった。

しかもその犯人は修を轢いた後そのまま逃げてしまった。

ただ大方の出来事で目撃者が何人もいたのと、そのうちの何人かがナンバーを覚えていたことから犯人は数日後あっさりと掴まった。

驚いたことに犯人はまだ21歳の大学生だった。

彼はその日デートの帰り道で、自分の彼女を家まで送ったあと近道をするために公園の前を通る細い道路に入ってきた。

そして運転中疲れていたときちょうど修のところの信号が黄色信号

から赤に変わったが、ついアクセルを踏んでスピードを上げそれを突っ切ろうとしたらしい。

もつと驚いたのはその彼が逮捕されたあとの態度だった。

彼は修の方が信号を無視して渡ってきたと主張した。

しかしこれは周りに居た複数の目撃者の人たちの一致した主張で彼の信号無視は明らかだった。

するとその彼は今度は「すでに企業への就職が決まっているからどうが見逃してほしい。」と言い始めた。しかもそれを彼だけでなく彼の両親も言っていたそう。

ウチの両親はそのあまりの身勝手さに絶句したらしい。

結局その大学生は大学を4年生のときに除籍処分になって刑務所へと入ったそう。

ただウチの両親はその彼の将来のことも考えて、民事の賠償金についてはかなり減額してあげたらしい。そしてそれを一度に払わなくてもいいから、彼が出所後キチンとした仕事に就いたら毎月その中から8万円を送付すること。これを定年になるまで続けて欲しいと言った。

8万円というのは微妙な金額で、20代にとってはけっこう大きなお金だけど、40代くらいになれば節約すればある程度は削れる金額だ。

アタシの両親はそうすることによって自分の犯した罪を一生忘れないでいて欲しい、そしてもう二度とこのような過ちを犯さないようになって欲しいとの願いからだ。

それから6年

その彼も今は出所してちゃんとお勤めをしているらしい。

ウチの両親の温情はそれまで身勝手だった彼の心にも相当響いたらしく、毎月お給料日から3日以内に銀行振り込みではなく現金書留

で送ってくる。

そしてその封筒の中には必ず

今の自分の気持とかを書いた手紙が添えられていた。

じつはその彼には内緒にしているらしいが、ウチの父親は彼の勤める会社の社長に彼を色眼鏡で見ず公平に扱ってあげて欲しいとお願いしているらしい。

説明が長くなっただけ、そんなわけで今この家ではアタシは長女でしかも一人っ子のわけだ。

そういえば、修もチョコケーキが好きだったなあ…。

小さい頃アタシがあの子の誕生日にお小遣いを貯めてチョコがたくさんなかったプデコレーションケーキ買ってきてやったことがあったけど、あの子ものすごい喜んでそれを頬張ってたっけ。

そして

アタシはそれからけっこう頻繁に凧の家に遊びに行くようになった。

彼女の家に行くときはいつも家の近くの評判の店でケーキを6つ買っていく。

そのうちのひとつは悟君のためのチョコクリームがたっぷりかった生チョコケーキ。

しかし、3回目に彼女の家に遊びに行ったときには、彼女のお母さんはアタシにこう言った。

「みーちゃん。ウチに遊びに来るのにそんなに気を使わなくつていいのヨ。高校生なんだからお小遣いだってそんなにあるわけじゃないんだから。手ぶらで遊びに来てくれればアタシだって嬉しいからね。」

（ああ、凜のお母さんってすごく優しいんだな）
って思った。

でもアタシは悟君が喜ぶ顔をどうしても見たいわけで。
だからアタシはカレの分だけを買って行き、凜にこっそり渡して冷蔵庫に入れておいてもらったりした。

ただ、悟君ももう中1のわけで、異性というのを意識できる年齢だろう。

しかも3歳も年上のアタシがこうしてしまうことがカレの気持の中で迷惑になっていないだろうかという心配はいつもあった。
だからアタシがあげているケーキを本当に悟君が喜んで食べてくれているのか、それを凜に聞きたくてもさすがに聞けない。

ある日

チア部の連絡事項を伝えるために凜の家に電話したとき、たまたま悟君がその電話を取った。

そのとき

「みーちゃん、この前買ってきてくれたケーキすごく美味かったー。アリガトね。」

とカレが素直に喜んでくれている言葉を聞いたときはアタシ本当に嬉しかったんだあ。

「よかったあー。じゃあ、みーちゃん今度はもつと美味しいチョコケーキ買ってきてあげる。」

「わぁーい！ ホント！？」

「ウン！ ホントさぁー。 新宿にね、すごく有名なお店があるの。今度遊びに行くときはそれを悟君に買っていつてあげるから。」

「やったぁー！ みーちゃん、だいすき！」

「ホント？ うれしいー！ アタシも悟君だーいすき！」

アタシは何のために電話したのかも忘れて、カレの嬉しそうな声にこんなにはしゃいでしまうんだ。

第三話 それは嫉妬？

アタシが高校2年になったところには、アタシはカレを悟と呼び、そしてカレはアタシをみー姉ちゃんと呼ぶようになっていた。

凜は

「なんでホント姉のアタシが凜ちゃんでミコがミコちゃんなのにみーちゃんだけみー姉ちゃんって呼ぶの？」

なんて悟に言ったらしいけど、悟にもよくわからないらしい。でも悟がアタシのことを頼りにしてくれるのはすごく嬉しい。

それでもアタシがカレと会えるのは、凜の家に遊びに行ったときだけ。

それも凜やミコと一緒にいるわけだからカレとばかり話すわけにもいかない。

そんなわけで、なんと友達の弟に強烈なブラコンを持ってしまったアタシなんだけど、そんなアタシも男の人から告白をされたりしたことがあった。

それはちょうど高2の終わりごろのことだった。

相手は同じクラスの田所君。

彼はバスケット部に入ってて身長が高くけっこう女子に人気がある人だった。

アタシはそれまで彼を意識したことはぜんぜんなかったんだけど、その年の文化祭でたまたま同じ実行委員になって放課後の行動を一

緒にすることが多くなった。

そして実行委員の打ち合わせがかなり遅くなったときには渋谷駅まで一緒に帰ったりしたこともあった。

そうしたある日

やはり委員会で遅くなって田所君と一緒に渋谷駅に向かって歩いていったとき彼はアタシにこんなことを聞いてきた。

「ネエ、佐倉さん…。」

「ウン、なあに？」

「今度の日曜日って何か予定あったりする？」

「今のところはないけど。」

「じゃあさ、もし良かったら一緒に映画見に行かない？　じつはずっと楽しみにした映画があるんだけど、一人で行くのも面白くないしさ。」

これがいわゆるデートのお誘いだっていうことくらいは、いくら彼氏いない歴〓実際年齢のアタシにだってわかる。でもアタシは今まで彼がアタシにそんな誘いをするなんて考えたこともなかった。そして何か心にひっかかるものがある気がしてしょうがない。

「ウー…。」

悩む、悩むアタシ。

「そんなに…悩むほどのことかな？」

田所君はチョット寂しそうにそう言った。

「もし迷惑なら断ってくれていいんだし、ただ一緒に遊びに行けたらって思ったただけだから。」

そうか。

アタシって考えすぎなのかも。

別に付き合ってくれて言われてるわけじゃない。

ただ一緒に遊びに行こうって言われてるだけなんだから。
もっと気軽に考えていいんだよネ。

「ゴメン。いいヨ。映画一緒に行こう。」

アタシはニコツと笑って彼にそう言った。

そして田所君との約束の日の前日の土曜日の夜

アタシが自分の部屋で本を読んでいると

ピロロロロ……。

とアタシの携帯電話が鳴る音が

（誰だろう？）

ベッドの横に置いた携帯を取り上げ着信表示を見ると

『SATORU』

（あ、悟からだぁー♪）

「もしもし悟？」

「あ、みー姉ちゃん？ オレ。」

「ウン。どうしたの？ ちょっとビックリしたー。」

「あのさあ、明日ってみー姉ちゃん何か用事ある？」

「エ、明日？」

「ウン、そう。」

「ゴメン。明日はアタシちょっと…。」

「そっかぁ…。」

「悟、何かあったの？」

「ウン……。じゃあ、いいや。夜遅くゴメンね。」

「エ、あ……。」

アタシから尋ねる間もなく、そう言って悟はそのまま電話を切ってしまった。

（なんだろう……。）

（せっかく悟が電話をくれたのに。）

そして次の日

約束の時間の少し前

アタシは田所君と待ち合わせした渋谷センター街の入口に向かうとすでに彼はその場所に来て待っていてくれた。

（へえ、時間にしっかりしているんだ。）

こういうことは好印象だ。

たとえ相手が男でも女同士であつても、約束した時間に平気で遅れてきて、しかも悪びれたそぶりも見せない人を見るとホントにムカつく。

たとえば、もし、もしもヨ？

アタシと彼が付き合うようなことになったとして、いつも男の人の方が先に来ていなくてもいいと思うんだ。お互い早く顔を見たいって気持ちが出てくればアタシも彼より早く来てしまつかもしれないし。

そんなことを考えながらアタシは彼に近づいていく。

彼はアタシに気付くとニコツと笑い手をあげた。

「オハヨー。」

「オハヨー。ゴメンね。待った？」

「いや、オレ早く来すぎちゃったんだ。」

「どれくらい前から待ってくれてたの？」

「エッ、30分くらい前かな。」

「エー！ 30分も前から！？」

アタシは思わず噴出してしまった。

「クスクスス……。」

そして、そんなアタシを見て彼は照れくさそうに笑っている。

そのとき思った正直な印象は

「へえ、男の人ってこんなふうにも笑うんだ？
ってこと。」

だって、彼氏いない歴〓 実際年齢のアタシにとってこんなふう
に笑う男の人の顔を見たのは初めてだったもん。

「じゃあ、少し早いけど行こうか？」

「ウン！」

アタシたちはセンター街からほどない距離にあるシネマホールに向
かった。

映画館の前に着くと、そこにはすでにけっこう長蛇の列ができてい
た。

「わあ、すごい人気だねえ！」

アタシが驚いたような声をあげると

「ホントだなー。あ、チョット待ってて？」

と彼は言って券売コーナーのほうへ小走りに走っていった。

少しして戻ってくると小さく息を切らせて

「ゴメン。この回の指定席券はもう売れきれちゃったそうなんだ。

でもこれじゃ座れてもかなり後ろのほうの席になっちゃいうそうだな。」

「いいヨ。後ろの席だって、もし座れなかったら立って見たっていいんだし。」

「エ、でもそれじゃ佐倉さん疲れちゃうだろ？」

「それだけ面白そうな映画だってことなんだから少しくらい疲れたって気にならないヨ。ネ？」

「そっか。ならよかったー。」

「田所君、アタシに気を使いすぎだヨ（笑）」

「あ、そっかナ？（笑）」

ホールに入るとやっぱり後ろのほうだったけどアタシたちは上手く席に座ることができた。

「席とれてよかったネー。」

アタシはそう言いながら自分のバッグからメガネを取り出した。

「あれ、佐倉さんってメガネしてたっけ？」

「あ、普段はかけてないの。遠いところ見るときだけ少しぼやけるから。」

「そっか、だからかな。」

「エ、なにが？」

「ときどきメガネかける人って目がキレイだっていうから。」

「そ、そうかな…。」

男の人にそんなこと言われたのは初めてだった。

もちろんそんな風に言われればぜんぜん悪い気はそいないけどでも、なんていい返したらいいのかわからない。照れてしまう。

「あ、映画はじまるヨ。」

アタシは誤魔化すようにそう言って前を向く。

映画はけっこう面白かった。

TVでもかなり前から評判になっていたアメリカの有名俳優が演じるアクション物で、その結末はハラハラドキドキ最後まで目が離せなかった。

「あー、おもしろかったネー！」

見終わってもまだドキドキ感が少し残る。

「まだ時間も早いしさ。どっか喫茶店でも寄っていかない？」
彼がアタシにそう誘った。

「あ、ウン。いいヨー。」

そう言っアタシたちが劇場を出ると、同じホールの隣の劇場では今大気でヒットしている『映画怪物くん』の上映をしているらしかった。

（あ、そういえばこれって悟が前に話してたなあ。）

そのときちょうどこの劇場でも上映が終わったらしく、中から次々

とお客さんたちが出てきた。

すると

その中に

びっくりした！

悟の姿が

カレは友達らしき男の子と2人で劇場の中から出てきた。

「悟ー！」

カレはアタシの驚いた声にクルツと振り向く。

「エ、あー！みー姉ちゃん！」

「悟ー。びっくりしたあー。こんなところで会えるなんて思わなかったヨー。」

「ウン。友達と映画見に見たんだ。」

「そっかあ。悟、前にこの映画のこと話してたもんね。」

「みー姉ちゃんは？」

「あ、アタシはこっちのほうの映画。」

そう言っアタシは今まで見ていた映画のパネルを指差した。

「そうなんだ？ 凜ちゃんとかと一緒に？」

「あ、エツト…。」

アタシはなんて言ったらいいか躊躇った。

すると横にいた田所君は

「知り合いの子？」

とアタシに尋ねてきた。

「あ、ウン。凜の弟さんなの。」

「凜って、同じクラスの小谷さん？」

「ウン、そう。」

「そうなんだ。やあ、はじめまして。田所っていいです。」
彼はそう言って悟に挨拶をした。

悟ははじめ少しキョトンとした顔をして、そしてその後急にムスツとした表情に変わって、田所君に何も言わずペコンと頭だけ下げた。

「みー姉ちゃんの彼氏？」

悟は不機嫌そうな表情でアタシにそう尋ねる。

「エ、ち、ちが…。」

”ちがうヨ！”

アタシはそう否定しようとしたとき

急に横にいた田所君が

「まだ、わかんない。そうなるかもしれないな。」

と悟るに言ってしまった。

「チヨ、チヨット！」

アタシは怒ったように田所君の方を向く。

「ふうん、そう…。」

「エ、あの、悟…。」

「じゃあ、ボクこの後友達と用事があるから。」

そしてプイツとした顔をした悟はその友達とスタスタと出口の方へ歩いて行ってしまった。

「チヨ、待って？ 悟ー。」

アタシはそう声をかけたけどカレはアタシの声に振り返ろうとはしなかった。

第四話 友達の弟だって…

「オレ、なんかまずいこと言っちゃったかな…。」

「そんなことはないけど…。」

せつかく誘ってくれた田所君には悪いけど、アタシの気持は一気にドーンと落ち込んでしまった。

「ねえ、さっきの子は小谷さんの弟さんだって言ってたけど。」

「ウン、そうだよ。」

「今何歳くらいなんだろう？」

「アタシたちより3学年下だから今中2。」

「あ、3歳も下なんだ。でも、お姉さんの小谷さんにならわかるけど、佐倉さんはあくまでお姉さんの友達なんだから…。」

「ウン…。」

そして

周りに人が少なくなったとき田所君はアタシの方を向いてこう言った。

「あのさ、もし嫌じゃなかったら、今度オレと会ったときから友達としてじゃなく彼氏として会ってくれないかな？」

「エ…。」

「ずっと君のことが好きだったんだ。文化祭の同じ実行委員にな

ったのもキミがいたからなんだ。」

「あ、あの…。」

「今返事をくれとは言わないから、考えて返事してくれれば。」

「ウ、ウン…。」

そして

その日、田所君はアタシをそのまま渋谷駅まで送っていつてくれて分かれた。

家に帰っても今日あったことがアタシの頭の中をグルグルと渦を巻くようにまわっている。

田所君とは今までそれほど仲良く話すような関係じゃなかった。でも今日一緒にいてしっかりとした感じの良い人だっていうことはよくわかった。

だからもしお付き合いをしたとしたらアタシは彼のことを好きになつてしまう可能性はあるかもしれない。

じゃあ悟は？

悟は友達である凜の弟。

しかも3歳も年下だ。

アタシが大学生になつてもカレは高校生。

アタシが大学を卒業してもカレはまだ大学生。

それにいつかカレにも同じ年齢の彼女ができるかもしれない。

そうなったとき、アタシはやっぱりあくまでお姉さんの友達にすぎない。

こういうことを考えてしまうのはもしかしたら女のズルさなのかもしれないけど。

でも悟と話しているとき、アタシはホントに心の中が温くなるの

を感じられる。

アタシはいつもカレに何かをしてあげたいという気持ちでいっぱい自分をわかっている。

アタシは思い立って凧の携帯に電話をかけてみた。

「もしもし、凧？」

「みーちゃん？ どうしたの？」

「あ、今電話しててもだいじょうぶ？」

「ウン。 今部屋で本読んでいただけだから、いいヨ。」

「あのさあ、今日たまたま渋谷行ったら、悟に偶然会ったんだけど……。」

「エ、あー、そっかあ。」

凧は何か思い当たるような声をあげた。

「そっかあって？ なんかあったの？」

「あ、ウン。 じつはあの子昨日の晩に父親から映画の招待券2枚もらってさ。」

「エ、もしかしてその招待券って怪物くんの映画の？」

「ウン。 良く知ってるねー。 それでいつもみーちゃんにご馳走してもらってばかりだから明日みーちゃんを映画に連れてってあげようかなって言ってたんだヨ。」

「エエエツ！ そ、そうなの？」

「ウン。 でも、電話したらみーちゃんなんか用事あるみたいだから

って残念そうな顔してたの。　じゃあ、その後多分友達誘って行っ
たんだろっねー。」

（そ、そうだったんだ…。）

（ゴメン、悟。　せつかく誘ってくれようとしてくれたのに、アタ
シ…。）

アタシは

アタシにとって悟が友達の弟のままでいい！

悟が、アタシが他の男の人と付き合うことを不愉快に感じるなら
アタシは悟の笑顔をこのままずっと見られているほうがいい。

決めた！

そしてアタシは次の日の放課後、
大学キャンパスの隅にあるベンチで田所君と待ち合わせをした。

アタシは彼に、お付き合いという気持ちはあまり起きないことを正
直に伝えた。

「もしかして昨日の小谷さんの弟さんとのこと？」

そう聞かれるだろうことはアタシも当然予想していた。
でもそこまでアタシの気持を話してしまうと、凜にも迷惑がかかっ
てしまうかもしれないと思った。

「ウン。あの子はいくまで友達の弟だから。可愛いとは思っけど、それ以上の感情はないヨ。」

きつと男の子とだったらこういふときにウソはつけないんだろう。でも女はこういふときは平気でウソがつけてしまうんだ。

「じつはアタシ、ずっと好きな人がいて……。」

「その人に佐倉さんの気持は伝えないの？」

「あ、その人はずっと付き合ってる彼女がいるから……。」
「そっかあ……。」

ゴメンね、田所君。

こないかにも少女マンガにありそうなウソついちゃって。さすがにアタシの心も少しチクチクする。

田所君と分かれアタシは、すぐに悟にメールを送る。

「悟、ゴメンね。怪物くんの映画、最初みー姉ちゃんのこと誘ってくれようとしたんだってね。昨日一緒にいた人は彼氏じゃありません。付き合う予定もありません。今度また悟の見たい映画があったらみー姉ちゃんのこと誘ってくださいネ。」

するとそれから10分もせず悟から返信メールが来た。

（あ、悟からだあー♪）

「じゃあ、今度ボクが誘ったときは一番優先してくれる？」

（アハ、かわいいんだー♪）

「ウン！凜やミコに誘われても悟の約束を一番にするヨ。」
そう書いてアタシはまたメールを送る。

「ウン。じゃあ、絶対だヨ？」

ゼッタイさあー！

第五話 ショック！悟がいなくなっちゃうの！？

高3のとき、アタシがなぜ芸能界に入ろうって思ったか。じつをいえば、それはアタシ自身でもよくかっっていない。

あるとき

スターダスト事務所の前田さんがアタシたち3人に芸能界を勧めたとき

凜とミコはその場でそれをスッパリと断った。そしてアタシだけがその申し出を受け入れた。

それは今から思えばほとんど衝動的ともいえる返事の仕方だったと思う。

もしかしたら、前田さんもそれを感じていたのかもしれない。

前田さんはその後もう一度アタシの意思を確認するため、今度はアタシだけを事務所に呼んだ。

「まず君は現在高校生であること。これはとても大切なことだ。なぜなら高校生はまだ子供であり、我々はたとえ芸能プロダクションであっても大人という立場であること。だからまだ子供である君の人生を芸能活動に切り売りさせるようなことは絶対にしたくない。

わかるね？」

「ハ、ハイ。」

「できうる限り、芸能活動をすることによって君自身の人生が豊かになれるようにしたい。ただし、ここからが大切だ。時間というものはすべての人に平等に与えられているものだから、同じだけ与えられた時間の中で何かを得ようとすればそれによって犠牲になるこ

とも当然でてくる。例えば友人と遊び時間とか、一人でゆっくりする時間とか。私はそういうものは享受できる時期に享受しておかないと人生としてとてももったいないとも考えている。それでも君はそういうものを犠牲にして芸能活動をやる意志があるかということだ。」

前田さんはまっすぐアタシの方を向いて、そう確認した。

「あの、こんなのが応えになるかどうかわかりませんが、アタシは今まで自分のハッキリした夢って持ったことがなかったんです。小谷さんも藤本さんもそれぞれ夢があつて、それがとても羨ましかった。だからもし芸能界がアタシの夢になるなら、チャレンジしてみたいって…。」

「…なるほど。それじゃ、頑張れる意思はあるかな？」

「やります！絶対に頑張ります！」

こうしてアタシの芸能界入りは決まった。

このことを悟に話したとき、カレは正直あまりピンとはきていない様子だった。

ただ今まで身近な存在だったアタシが少し遠くへ行ってしまうかもということを感じていたようだ。

そのことでカレは少しかり不機嫌な顔をしていた。

アタシはデビュー前に凜の家に遊びに行ったとき、悟の部屋に行きカレと少し時間をとってそのことを話すことができた。

「芸能人になつたら、みー姉ちゃんきつとこうやってウチにいつも遊びに来れなくなっちゃうね。」

カレはアタシの顔から目を逸らしてそう言った。

「ウン、少し減っちゃうかもしれないけど……。でも、アタシはずっと悟のお姉ちゃんの友達だし。悟にとってアタシはこれからもずっとみー姉ちゃんだから。」

「でも、芸能人ってたくさんファンがいて、そういう人たちみんなのものにならなくちゃいけないんでしょ？」

「そうだけど、でも、アタシにだってプライベートってあるんだから。だからアタシのプライベートはみんな悟にあげちゃう。」

「ホント？」

「ウン、ホントのホントさあー。だからこれからもみー姉ちゃんのこと慕ってくれる？」

「ウン！」

傍から見れば、本当の姉弟でもないのにこんな会話ってチョットヘンなのかもしれない。

でも、アタシにとって悟は何よりも大切な存在になってしまっていた。

ただそれがどう大切なのかはわからない。

男と女としてなのか、それとも死んでしまった修の面影だったのか。でも、不思議とアタシ自身の気持では悟と修がダブることはなかった。

芸能活動が忙しくなってきたアタシが段々学校に通えなくなってきたとき、アタシは真剣に転校を考えざるをえなくなっていた。

そのときマネージャーだった男の人はアタシにハッキリこう言った。「高校生だからって甘えられちゃ困る。オレたちはこれで生活しているんだ。君が自分で決めて芸能界に入った以上しっかり責任を果たしてもらいたい。」

アタシはそういう言葉にドンドン追い詰められていった。

青葉学院は大学までの一貫校だったから、普通にやっていけば系列の大学に進学することは難しいことではない。

ただ、それはあくまで高等部をちゃんと卒業できることが大前提であって、今のまま週に2回程度しか授業にでれないようじゃ推薦どころか高等部の卒業だって危ういのはアタシにだってわかった。

「あの、授業にはちゃんと出たいんですけど……。」

そういうことをマネージャーに言ったこともあった。

しかし彼は

「君も高3だろ？ 女子高生としてのブランドで売れる期間も少しなんだから、我慢してもらえないかな！」

そして最後には「青葉みたいな勉強に厳しい学校じゃなくてもっと仕事に融通の効く学校に転校をすべきだ。」と言い始めた。

「一生懸命勉強してせっかく入れた学校なのに！」

そう言って抵抗しても

「芸能活動を希望したのは君自身だろ？ もし君が芸能界を途中退場することになったらどれだけ多くの人たちが迷惑するかを良く考えろ。君は元の普通の高校生に戻って何食わぬ顔で過せばいいん

だろうけど、今まで君に投資した資金は全部無駄になり、そして君に関わって仕事をしている人たちはもしかすると仕事をなくしてしまいかもしれないんだよ！」

だからアタシは正直いって少し怖くなってしまった。

そういう人たちの生活がアタシの肩にかかってしまっているなんて、それまで思ってもいないことだったから。

そしてそんなアタシを救ってくれたのは凜とミコという大切な友達だった。

彼女たちは担任の佐藤優実先生を動かして、事務所の重役である前田さんと話をしてくれた。

そのときはじめてわかったのだが、それは前田さんも寝耳に水の話だった。

前田さんは高校生としてのアタシの立場を尊重するようにマネージャーに指示していたのだけど、マネージャーは独断でアタシの予定を埋めていってしまったらしいかった。

そして前田さんからマネージャー部長にそのことについて改めて厳しい指示とアタシの担当マネージャーの交代が行われた。

そんなわけでアタシもなんとか卒業と大学推薦に向けての勉強を続けることができた。

そしてアタシたちが大学に進学した年、悟も高校受験で念願の都立戸川高校に入学した。

悟は合格発表から戻ってきてすぐにアタシにそのことをメールで知らせてくれた。

そのときアタシはTVドラマの撮影の真っ最中。

ロケ先で本番前の合間に悟からのメールを見て、アタシはその場で思いっきり飛び上がりたい気持だった。

そのときは撮影でちょうどアタシが大喜びして友達役の女の子に抱きつくシーン。

ただアタシはそれまでどうも上手く感情移入ができずに何回かのNGを出していた。

そして少しの休憩をもらい、これが3回目の本番撮影。

ハイ、本番！

そして

「わぁーーーーーい！！よかったねー！」

アタシは慢心の笑みを浮かべて彼女の首に抱きつく。

ハイ、カットオー！

「いいじゃない！ みーちゃん、どうしちゃったの急に？」

監督さんの驚いた表情にアタシはただ照れ笑いをするしかなかったんだ（笑）

そして4年後

アタシは大学を卒業し、悟は慶洋大学の2年生に進級する。

この頃からアタシはドラマの仕事だけでなくCMや映画などでもかなりお仕事が来るようになって、芸能活動もかなり忙しくなっていた。

凜の家に遊びに行ける機会もほとんどなくなり、悟とも電話やメー

ルで時々話すくらい。

月に2回ほどあるオフの日には疲れて家でグダグダとしてしまう日々だった。

（あーあ、疲れたなあ。　　そういえば悟の声も今月は一回も聞いてないや…。）

カレも今はもう大学2年生。

音楽系のサークルに入ってギターを担当しているなんて話をしていたけど、そういうところじゃ女の子もたくさんいるんだろうし、もしかしたらもう彼女なんかできてたりして…。

凜は大学卒業後国連大学に勤め、そしてミコは初等部の先生になった。

国連大学は青葉の正門前にあるので、2人でときどき一緒に帰ったりもしているらしい。

（なんか、アタシだけ取り残されちゃってるみたい…。）

そんなことを考えながら

ベッドに身体を横たえてボーっと天井を見上げていたそのとき

ピロロロロ - - - - -。

机の上に置いたアタシの携帯電話のメールの着信音が

（んー、誰だろ？）

なんか起き上がってみるのも面倒くさい。

それでもモソモソとベッドから降りて
どうせ仕事の連絡だろうくらいに思っ
て着信表示を見ると

『SATORU』の文字

（あ、悟からだあー！）

アタシは滅入った気持ちが一気に吹き飛ぶような気持ちになった。

「みー姉ちゃん、今日オフだよネ？　今ひとりだったら電話ちょー
だい。」

アタシは喜び勇んで悟の携帯に電話をした。

「やつほー。悟、ひさしぶりいー！」

「あ、みー姉ちゃん？　今だいじょうぶなの？」

「ウン。今自分の部屋に一人にいるところだから。悟はどこから？」

「じつはさあ、オレ今みー姉ちゃんの家のお傍からなんだ。　今から

出てこれない？」

「エ、今から？」

アタシは部屋のカーテンの隙間から外を眺める。

最近アタシの周りにも芸能関係の記者がいるという噂を聞いていた。
見た感じではそういう気配はなさそうだ。

「オツケー！　じゃあ駅前のAngelって喫茶店で待ってて？」

アタシはそれからさっそく変装の準備を始める。

よれたジーンズと薄いブルーのシャツに着替え、そして髪の毛はひ
つつめて後ろで1つに束ねた。

さらに念には念を、黒の伊達メガネをかけてこれで変装完成！

そして注意しながら裏門から自転車で家を出る。

待ち合わせの喫茶店ではすでに悟が奥の方の席に座ってコーヒーを飲んでいた。

手にはタバコを持って煙を燻らせている。

アタシは後ろから近寄り悟の肩に手を置いてこう言った。

「こらあー、キミはまだ20歳前だろー!？」

悟は持っていたタバコを灰皿で消しておどけたようにこう応える。

「ゴメンなさい！ 見逃してくれたらご馳走しますから!」

「よーし。じゃあ、特別に見逃してあげよう!」

「アハハ、みー姉ちゃん。ひさしぶり。」

「ウン。悟、元気そうー。」

「急にメールくれるんだもん。びっくりしちゃった（笑）」

「あ、ウン…。」

「どうしたの？ 何かあった?」

すると悟は戸惑ったような表情でいる。

「みー姉ちゃんに言いたいことがあって来たんでしょ？ アタシ、悟のためならできる限りのことするから、言ってみて?」

「ウン。じつはさ、オレ、みー姉ちゃんとしばらく会えなくなっちゃうかも。」

「エエエッー!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2203z/>

弟以上恋人未満（みーちゃんと悟の場合）

2011年12月10日21時47分発行